

# 審判員ハンドブック

JCBA 日本キャップ野球 競技規則委員会

今回この文書を発行するに至ったのは、一つは普段キャップ野球を楽しんでいる皆様に、より一層楽しんでいただく為にルールの周知を促したいという思いからです。もう一つは、この競技の特性上、競技者が審判を行う為、審判がスムーズに行えればより気持ちよく皆様がプレーできるのではないかと考えたからです。多少長くなってしまっていますが、是非ご一読いただけますと幸いです。

## 仕事・注意点について

### 試合前

- **キャップ野球規則をしっかりと読み込む。**  
[キャップ野球規則 2022年5月版](#) (日本キャップ野球協会 HP にも掲載)
- 主審や副審、線審、記録、(撮影)が決まっているかの確認。
- コートに不備がないか確認する。(ラインやベースなど)
- 両ベンチに行きオーダーを伺いに行き、記録係はオーダーの入力を行う。  
(この時、主審は不備がないかを確認する為、なるべく同伴するのが望ましい)
- 開始時刻に遅れないよう、(場合によっては催促して)整列させる。
- 両チームに伝えなければならない事は、試合前に必ず伝える。(時間や会場特別ルール等)

### 試合開始時

#### 主審

- 投手からキャップを最低2個、出来れば3個預かる。  
→ 預かったキャップの種類が同一のものか、(2種以上ある場合はそれぞれ)確認する。
- 球数がオーバーしていないかを数えながら、投球練習を見守る。  
(その投手が試合内で初めて登板する時は5球、これに該当しない時は3球 ※キャップ野球規則 5.03 に記載)
- 投球練習が終わり次第打者を招き、**打者**の準備が整い次第「プレイ」のコールをする。
- **場所については、両足がパスボールラインの後方にあるように立つ。**
- **上半身の姿勢については、判定しやすいよう少し前のめりだと望ましい。(棒立ちは見栄えが悪い)**

#### 副審

- 場所については、ホームベースの真横を軸として、光の反射や打者、捕手との距離を考えた上で適切な場所を確保する。

- 姿勢は、しゃがみやひざ立ち、中腰などが望ましいが、その姿勢が辛い場合などもある為、その場合は座るなど柔軟に対応する。  
(優先すべきは、公正なジャッジをするのに適した姿勢を取る事)

## 線審

- 場所については、アウトラインとファールラインの交わる点と、フェンスとファールラインの交わる点の2点が見やすい場所を確保する。  
(前者は、打球がフェアかファールか、アウトラインを超えたかなどを判断するのに必要で、後者はホームランやエンタイトルツーベースが成立するかの判断に必要。)
- 姿勢は、動きやすいように立っているのが望ましい。

## 試合中

### 主審

- ストライクやボールのコールは、副審の方をチラッと見てから、コールを行う。但し、結果が明らかな場合は、副審の方を見ずにコールをしても良い。
- 打撃結果については、捕球や蓋の軌道などを確認し、時には副審や線審と協議を行っても良いので、正確に判定するよう努める事。特に、フェンスとファールラインの交わる点(いわゆるポール際)とアウトラインの判断は難しい為、重要な場面などで判断がどうしてもつかない場合などは映像検証なども用い、慎重に行うこと。
- スイング判定については、明らかにスイングをしている場合を除き、副審に「スイングは？」等の確認を行ってからジャッジする。
- 投手がキャップの交換や補充を要求した際は、素早く投手に蓋を投げる。
- **全審判共通**だが、フライなどが上がった際はプレーの邪魔にならないよう即座に捌ける。もし、審判に蓋が当たった場合は、「審判に当たらなかったら」どうなっていたかを基準に、判断を下す。

「ジャッジのコールについて」

ストライクやボール、パスボールなどのコールの際に行うジェスチャーは、必ずしも同じである必要性はないが、規則性のあるものであることが望ましい。そこで、ここではその基準を記載する。

- ストライク  
コールと同時に腕をあげ、手をパー以外の何らかの形で出すことが望ましい。
- ボール  
コールと同時に腕で何らかのジェスチャーをすると紛らわしい為、腕を上げないでコールを行うのが望ましい。コースなどを出したい場合は、少なくともコールから遅らせる事。

- アウト  
腕を高くあげ、握り拳を作りながらコールをするのが望ましい。
- パスボール,暴投,振り逃げ  
三つとも、両手を手前から奥に流す動作を行いながら、コールをするのが望ましい。

## 副審

- ストライクやボールの判定については、蓋が自分の前を通過した段階で素早くジェスチャーを行う。この時、副審には判定の最終決定権が(ハーフスイングを除き)無いため、コールを行ってはならない。
- 主審だけではパスボールラインをギリギリ超えたかどうかの判断などもしにくい為、蓋の行方については、できる限り追うように努める。
- スイング判定については明確な規定はない為、審判(副審)の裁量によって決まるが、規則に明文化は出来ないとしても、ある程度明確な基準は必要だと思った為、ここに記載しておく。

「ハーフスイングについては、蓋がベースの平行線上に到達した時から、蓋が捕手近辺に到達した時までの間で、ホームベースの一番手前(投手側)の辺とバットが平行になる瞬間があればスイングとする」

(主審,副審)「スイングが遅い(明らかな振り逃げ狙いの)時は、蓋がパスボールラインに到達した段階で打者のバットがスイングを最低限企図しているような位置にあるか、前段階で打者がスイングをしにしている状態であるかなどを主審と協議した上で判断する」

## 線審

- ファールラインやアウトラインの判定はチームで意見が激突しやすいため、ライン際に関してはしっかりと注視すること。  
(ライン上の裁定については、バッターボックスのライン上はバッターボックス内につきファールゾーン扱い、ファールライン上はフェアゾーン扱い、アウトライン上はアウト扱い、となる。但し、パスボールライン上はパスボール,暴投,振り逃げとはならない。  
※キャップ野球規則 2.01 に記載)
- 線審は、ライン上の判定が主な業務となるが、投手がきちんとピッチャーズライン(プレート)を踏んでいるかをしっかりと確認する。

## 心構え等(プレイヤー側も含めて)

### 全審判共通

- キャップ野球規則はあくまで「法律」のようなものなので、実際の細かいあらゆる判断

は審判がする事になる為、審判は規則に則り、その時々に応じて解釈等も交えながら正しく裁定を下す必要がある。

- 審判は、選手を縛るのが目的ではなく、むしろ選手にのびのびとプレーして貰い、試合をより良いものにすることが目的である為、その目的を果たすために審判も全力を尽くす必要がある。
- 選手側に関しては、判定に疑問等がある場合は、その都度審判に**適切な態度、形**で抗議を行う事が望ましい。その際、基本は審判の判断によるが、審判団だけで判断が出来ない事例で特に重要なものに関しては、その大会の競技規則部門の責任者等に聞きに行っても良い。
- アピールプレーや抗議に関して審判団は、状況に応じて対応する必要があるが、明らかな反則や妨害等以外は基本的には静観の姿勢でも(規則の範囲内ならば)構わない。但し、審判にはある程度の裁量が認められている為、**スポーツマンシップに則っていない悪質と見えるプレー**に関しては、審判が状況に応じて警告を行うなどの対応を行う事が望ましい。それでも同様のプレーを行っている場合は、退場させる事も出来る。何よりも、試合を良い形で進行するよう最大限考慮した上で、裁量判断する必要がある。(※キャップ野球規則 6.04,8.01 に記載)
- **審判、選手共にスポーツマンシップに則り、互いをリスペクトした上で気持ちよく試合が行えるよう最大限努力する。**